

# 仏印了元禪師門人略考\*

徐 文 明\*\*

(中国 北京師範大学)

了元（1032-1098）は饒州浮梁の人、俗姓は林氏、明道元年（1032）壬申六月六日に生まれた。誕生時には吉祥なる事があり、風姿は卓越していた。早くに神童と称えられ、三歳にて『論語』を読み、五歳にして三千首の詩を誦んじた。しばらくして五経を授かり、ほとんどその大義に通じた。竹林寺において『楞嚴経』を読み、これを好んで、父母に出家の意を告げ、宝積寺の沙門日用を礼して師とした。慶暦六年（1046）、十五歳にて『法華経』の試経を受け得度し、具足戒を受けた。皇祐二年（1050）、十九歳にて廬山に遊し、開先善暹に参じたところ、機鋒するどく、大いに称賛を受けた。同年、さらに円通禪院に至り、居訥禪師に礼すると、居訥は書記を担当することを請い、大覚懐璉の職を継がせた。嘉祐元年（1056）、二十五歳、この年、善暹が入滅し、白雲守端が承天禪院に住持し、了元は師のために葬礼を営んだ。

嘉祐四年（1059）、二十八歳、居訥は円通禪院を白雲守端に譲り、守端に替えて了元を江州承天禪院の住持に推挙した。二十八歳とは、知られている資料の中で最も早く住持となった記録であり、徳高く人望の厚い居訥の強力な推薦がなければなしえなかったであろう。

了元は早くに出世し、三十年あまり、前後に九大利に住持し、門庭は隆盛し、多くの人材を輩出した。

『建中靖国統灯録』卷十一に拠れば、

---

\*原題「佛印了元禪師門人略考」。

\*\*北京師範大学哲学与社会学部教授。

雲居山佛印了元禪師法嗣

杭州百丈山慶善院淨悟禪師

問：「如何是佛？」

師云：「問誰？」

僧曰：「特問和尚。」

師云：「鷓子過新羅。」

問：「如何是新年朝佛法？」

師云：「問著便知。」

僧曰：“上大人、從頭起也？”

師云：“陽氣發時無硬地。”

僧曰：“有信來還去、無私古到今。”

師云：“大家回首謝東君。”

問：“古佛與露柱相交是第幾機？”

師云：“韶陽老漢也曾說著。”

僧曰：“學人今日有分也？”

師云：“大似勞而無功。”

上堂云：“說則搖脣、行則動脚。直饒不說不行時、錯、錯！”拍禪牀一下。

上堂云：“因果一言、到處隨緣；若人卜度、十萬八千。參。”<sup>1</sup>

杭州慶善院は、契嵩の時期には智岩が慶善精舎に住持し、また、慈明の法孫、武泉惟政の法嗣である宗震禪師もここに住持し、宗震の門人である普能禪師も住持し、さらに善能と同輩の守隆も住している。このため、淨悟が住持をした時間はそれほど長くはないだろう。

仏とは如何なるものでしょう、早く問え早く問え、そうでないともはや逃しているぞ。新年頭の仏法は、問えばすぐさまわかる。上大人、孔乙己、新年の仏法は一から始まる。陽気がひとたび発すれば万象は新たなり、春雨の降る時、地は尽く湿る。東君（春の神）の便りが去ってまた来た、天地は無私に古今をめぐる。皆ともに東君に感謝をする、新年頭に仏法あり。

この問答は主客の受け答えがとても生き活きとしている。

古仏は露柱に参ず、此れは第何機なりや。このやり取りは新しいものではなく、雲門がすでに述べている。このようならば今も昔も同様であり、学人に分がある。口舌を翻弄しても、勞して益なしである。

説けば口舌を弄し、行なおうとすれば足を動かすだけ。説かず行わずもまた大きな過ちである。ならばいかに行履をすればよいか。両端はともに立てず、中間は通れない。

因果を明らかにし、処々に縁に随うのだ。もし人が思量をすれば、それからは遥かに隔たってしまう。

『建中靖国統灯録』卷十一に拠れば、

常州善権山廣教慧泰禪師

問：“供養百千諸佛、不如供養一無心道人。百千諸佛有甚過、無心道人有何福？”

師云：“花從愛惜落、草逐棄嫌生。”

僧曰：“未審是一是二？”

師云：“一二且致、鼻孔因什麼在老僧手裏？”僧擬議。

師云：“蒼天、蒼天。”

師云：“諸佛出世、廣演三乘；達麼西來、密傳大事。上根之者、言下頓超、中下之流、須當漸次發明心地。或一言唱道、或三句敷揚、或善巧應機、遂成多義。撮其樞要、總是空花；一句窮源、沈埋祖道。敢問諸人、作麼生是依時及節底句？”良久、云：“微雲澹河漢、踈雨滴梧桐。參。”<sup>2</sup>

常州善権山広教院には、仏日智才の門人である珊禪師も、あるいは慧泰以前にこの山に住している。

無心道人は、黄檗希運から始まる。この問いもまた僧が洛浦に問うた語である。有心に愛し惜しめれば艶やかな花は落ち、無心に手をかけても草むらは生ずる。ゆえに有心は無心に及ばず、慈悲は自然に及ばない。この僧

は鈍く、さらに有心と無心とは一なのか二なのか（同一のものか、そうではないのか）を問うた。それが一か二かはさておき、おまえの鼻の孔はなぜ他人の手中にあるのか、落ちぶれて長くたっているのに、いまだに自覚がない。この僧はまだ議論をしようとする。思わず蒼天を嘆かずにはいられない。こんな愚かなものが、いたずらに衲僧と称しているとはと。

時節が不明ならば説法は無益であり、根機をわきまえなければ、牛に琴を弾くと同じだ。したがって、よく因縁時節を弁え、対象の根機を明らかにすることで始めて応機説法や対縁施教ができる。

『建中靖国統灯録』巻十一に拠れば、

洪州西山翠巖廣化慧空禪師

問：“如何是道？”

師云：“荒田不揀。”

僧曰：“莫便是和尚爲人處麼？”

師云：“量才補職。”

師云：“昨日雨霖霖、今朝日杲杲。文殊與普賢、全身入荒草。頼得王老師、夜來遣出早。”拈起拄杖云：“來也、來也。不見道：春無三日晴。”下座<sup>3</sup>。

洪州西山翠巖は、名僧を輩出している。先には文峰文悦や翠巖可真など、後には宝覺祖心の門人悟新などがここに住した。

荒田に入りて揀ばず、信手に草を拈来す。これは洛浦元安の語である。荒田にて揀ばず、そこかしこが道である。人のために施教するとは、才を量って職に補すのだ。白雲守端には次の頌がある。「秋江の清浅なる時、白鷺、烟島に和らぐ、良きかな観世音、全身、荒草に入る（秋江清浅時、白鷺和烟島、良哉観世音、全身入荒草）。」観世音だけでなく、文殊も普賢も同じく草むらに入っている。もし大棒を差し出さなければ、必ず後学を迷わせよう。ここから慧空禪師はおそらく俗姓を王といい、ゆえに南泉に習って王老師と自称したのだということが知られる。

『建中靖国続灯録』 卷十一に拠れば、

饒州密巖山浄土徳溥禪師

問：“如何是密巖境？”

師云：“芙蓉頂上清風起。”

僧曰：“如何是境中人？”

師云：“雨露壇前野老歌。”

問：“向上宗乘、如何指示？”

師云：“新聲調古曲、那箇是知音。”<sup>4</sup>

饒州密巖山には、慧南の法孫、薦福道英の門人である善忠禪師や圓照宗本の門人である慧旻禪師も住持しているが、彼ら三人の時期は比較的近く、その前後関係は未詳である。密巖の境、芙蓉頂上には、時に清風が起こる。境中の人、雨露壇の前では村の老人が歌を歌っている。向上の宗乘、新しい音ではあるが、古風な調べと変わらない。惜しむらくは知音がほとんどいないことだ。芙蓉頂や雨露壇はともに密巖山の名勝であろう。

『建中靖国続灯録』 卷十一に拠れば、

饒州崇福德基禪師

問：“向上宗乘、請師舉唱。”

師云：“多少分明。”

僧曰：“更垂方便。”

師云：“來風深辨。”

僧曰：“學人禮謝。”

師云：“不得錯會。”

師云：“若於遮裏會得、便能入一仏國、坐一道場。水鳥樹林、共談斯要；樓臺殿閣、同演眞乘。續千聖不盡之燈、照八面無私之燄。所以道：在天同天、在人同人。還有知音者麼？”良久、云：“水底金烏天上日、眼中瞳子面前人。”<sup>5</sup>

饒州崇福は北宋末期も雲門宗の道場であり、雪竇重顕の法孫、承天伝宗の門人である了禪師や、洞山晞舜の法孫であり、大滄懷祐の門人である清雅禪師および貴安禪師もかつてここに住持していた。德基はおそらく彼らの後の住山であろう。

向上の宗承はとっくに明らかである。さらに方便を垂れたまえ、その問いにはすでに答えた。このように謝礼を述べるならば、おそらくは誤って解しているだろう。もしここでわかれば、仏国に入り、道場に坐し、千聖の心を継承し、八方を照らし、天に在りては天身を現し、人に在りては人身を示し、機に応じて説法し、縁に随って衆生を教化することができるだろう。大覚懷璉もまた類似の説法をしている。

『建中靖国続灯録』 卷十一に拠れば、

雲居山眞如院仲和禪師

問：“如何是佛？”

師云：“問處分明。”

僧曰：“夜來松竹起清風、吹散白雲三兩片。”

師云：“且莫磕著露柱。”僧禮拜歸衆、師嘯嘯<sup>6</sup>。

了元は四たび雲居に住している。仲和は彼より後に眞如院に住持したのだろう。仏とは如何なるものでしょう。問うている者がそれだ。清らかな風が白雲を吹き飛ばして妨げず、決して露柱に触れてはならぬ。この僧はここで気づくところがあり、礼拝し大衆に帰った。すると師は喉の奥から声を出した、獅子吼を聞けと。

『建中靖国続灯録』 卷十一に拠れば、

廬山同安崇勝幼宗禪師

上堂、拈拄杖、召大衆云：“拄杖子是體。”擊禪牀云：“遮箇是用。直得高低普見、遠近皆聞。正當恁麼時、且道是分不分？”良久、云：“榔橫挑華藏界、

維摩掌上未爲多。”<sup>7</sup>

同安崇勝禪院は、慧南が最初に住持した寺院である。懷祐の法孫、帰宗恵通の門人である慶通もまたかつてここに住持していたが、それは幼宗の後のことだろう。了元は長く廬山で修学し、帰宗や開先の住持をしているため、その門人もここで開法をした者がいる。

拄杖は体であり、敲くことは用である。それでは体用は一体であるか否か。雲門はかつて三平の頌である「即ち此の見聞は見聞に非ず、余の声色無く君に呈すべし。个の中に若し全て無事なるを了せば、体用は分と不分とを妨ぐる無し（即此見聞非見聞、無余声色可呈君。个中若了全無事、体用無妨分不分）」を引用している。拄杖については、幼宗もまた手本通りにひょうたんを描いている（そっくり雲門の手法を模倣している）。この拄杖は華藏世界に挑みかかり、または維摩のように掌で仏国をつかみとる。その神通妙用は無辺無窮だ。

『盧溪文集』 卷三十五に拠れば、

#### 重修東華寺記

佛屋徧天下、大率費不貲、泥金繪、示瓊瑤、務爲不可勝者、多在夫通都大邑、水舟陸車、珠璣象犀、百貨之所萃、商官爭負挈營營、然貪眸不瞬、浮圖能一語傾之、則罄橐勿僞、此通都大邑之有利廟、所以視他處所爲最雄侈繁麗。至於荒僻窮絕之所、往往土圯木撐、罅漏不直、其徒乞丐不能動人、而檀那喜趨闡闡者且不肯出毫力於此、亦其勢然也。

東安在安福、不唯去通都大邑爲遠、而頽垣壞址、荒煙野草、至於尺椽寸瓦不留。鄉人劉氏世家貲、惜其湮廢、會青原幼宗禪師歸故鄉、乃相與出財力、破麩場、芟棘區、築宮而留之。經始於政和元年九月、落成於五年之十月。殿寢堂廡、厨廩鐘魚、一切視禪林成憲、所不可闕者咸置之。可枚舉以數也、佛像嚴具、壁張十八羅漢、皆金碧飛動、冠絕一時。有危欄出於衆屋之上、俯羣山、睨雲漢、而甌經於其間者、寺之華嚴閣也。挾方丈、開戶牖、塵埃

不生、神明頓還者、宗公之妙明室也。初構木、去江水爲遠、數十百人挽一材。夜有大雷電、浮而出者、衆益隆信之、果默有贊者耶。舊基四顧磽确、宗公覽其山水、爲高其址、數十舉步而易置其嚮、孤峯疊巘、層出雜見、竒偉怪麗、盤薄於煙雲杳靄之間、如有鬼神爲之徒。揭佳名勝、槩自我而作、宗公可謂無負於茲寺矣。蓋宗公本東華里中人、好遊名山、後爲佛印老禪師弟子。方佛印名譽轟轟動、四方學者千百爲羣、至於住大仰、金山、雲居、皆賴宗公垣塹佛事、凡有所建、輒赫突。紹聖中、出世爲長老、住南康鳳栖山、又住廬陵青原山。二山皆天下名藍、角立相望、宗公厭奔走、病其徒逐逐然不知歇。乃自青原飛錫來東華、甘槁薄而不去。其趨尚、類賢士大夫之有守而知退者。余嘗樂與之遊、當衆人夸漫突梯、肩相摩於世、而獨能超然高蹈、放懷嶄巖之巔、眎天下之物、不一動其心、豈學佛而有得者耶？劉氏旣出財力、以與興起數十年泯滅不傳之寺、於是而屬余識其復興之年月、考其初創者與其人、舊無文字可訂、特爲掇宗公重見之由、與吾鄉人之好善者、載之云爾。宣和二年十有二月吉日、迪功郎衡州茶陵縣丞管勾學事王某記。

これは幼宗が彼の故郷にある東華寺を重修した際の貴重な史料である。ここから見れば、幼宗は江西吉州安福の人で、了元に就き随って仰山、金山、雲居に居し、その寺殿を造営することを助けて、非常に功勞があった。紹聖中（1094-1098）に出世し、あるいは紹聖三年（1096）前後に江州廬山崇勝禪院に住し、後には南康同安鳳棲山に住し、さらに廬陵青原山に住した。彼は二刹を兼務して奔命に疲れ、それによりおよそ政和元年（1111）に引退し、故郷に帰った。故郷の人である劉氏は彼の居として東華寺を重建し、五年（1115）に竣工し、寺殿は一新した。宣和二年（1120）、王氏は記を撰した。幼宗は三たび禪刹に住持し、開法は三十年に及んだ（宣和二年時点でもまだ在世である）。幼宗は当時の影響力のある禪師であり、寺の造営に詳しかった。彼は禪師の中での技術者といえる。

『建中靖国統灯録』卷十一に拠れば、



婺州寶林懷吉真覺禪師

問：“德山棒、臨濟喝、未審是同是別？”

師云：“將諸（謂）是衲僧？”

僧曰：“學人未曉、特伸請益。”

師云：“不妨剗利。”

問：“如何是和尚爲人句？”

師云：“有問有答。”

僧曰：“得聞於未聞也。”

師云：“聞底事作麼生？”

僧曰：“六耳不同謀。”

師云：“也是。”

師云：“善慧遺風五百年、雲黃山色祇依然。而今祖令重行也、一句流通徧大千。大衆、且道是什麼句？莫是函蓋乾坤、截斷衆流、隨波逐浪底麼？咄！有甚交涉？自從有佛祖已來、未曾動著、今日不可漏泄真機去也。”顧視大衆云：“若到諸方、不得錯舉。”<sup>8</sup>

婺州雲黃山寶林寺は傅大士の道場である。

もし本当の衲僧ならば、徳山の棒や臨濟の喝の異同といった類の問題など聞くはずがない。人のための一句とは、問いがあれば答えよう。聞かざるを聞くという問題はさておき、聞くということは如何なるものだ。六耳（三人の耳）は謀を同じくせず、よし聞かせてあげよう。一句の流通は大千にあまねし。雲門三句によって会するな。仏祖はみな未だ述べていない。天機は漏らしてはならない。

『建中靖国統灯録』卷十一に拠れば、

信州鵝湖山仁壽徳延禪師

問：“如何是鵝湖境？”

師云：“一泓湖水春來淥、數隻仙鵝天外歸。”

僧曰：“如何是境中人？”

師云：“松聲來客座、山翠上人衣。”

師云：“眾口咸來發問端、當空一點欲訓難。而今大義重宣也、別起眉毛觀面看。久立。”<sup>9</sup>

鵝湖の境は、湖があり、鵝がいる。境中の人は、客あり主あり。空一点に当たっては如何に酬いるか。大義は重ねて宣べるから細かに看取せよ。『石門文字禪』卷二十一に拠れば、

### 信州天寧寺記

江南山水冠天下、而上饒又冠江南。自昔多爲得道者所廬、鵝湖、龜峰、懷玉、號稱形勝、而靈山尤秀絕。蓋唐義武初、西平周王發其天藏也、初建精舍、名興聖、神符天子改賜普明。沙門德延以講學、聚徒甚盛。弟子德熙者有智略、實陰相之。崇寧二年、詔革以爲禪林、賜田度僧、聽遇天寧節進功德疏、太守周公邠命長老德延爲第一世、而以僧正德熙董其事也。三人者敘立顧瞻而歎曰：寺以群居而自爲戶牖、犬牙相接如蜂房蟻穴、非相臣所以建、請集禪衲、演祖道、上延睿算之意。於是蟬蛻其卑陋而一新之也。入門縱望、序廡翼如而進、層閣相望而起。登普光明殿、顧其西、則有雲會堂、以容四海之來者；爲法寶藏、以大輪載而旋轉之、以廣攝異根也。顧其東、則有香積廚、以辦伊蒲塞饌、爲職事堂、以料理出納。特建善法堂于中央以演法、開毘耶丈室以授道。又閣其上、以像觀世音、示以聞思修、令學者入道也。粥魚茶板、霜顛螺頂、鳧趨而集、寂無人聲。餘履聲而禪齋密室、冰懷雪慮、株枯而坐、不見心相、惟身相也。嗚呼！西平王、郡太守雖異世而姓氏同、前以講、後以禪、而領袖者雖異趣、而名號同也。吾聞浮圖未成、故裴公美爲玄度之後身；千尺像畢、而僧護爲僧祐道宣之前身。古今所傳、不可誣也。宗衍禪師出自白牛法窟中、來嗣延公之法席、分照覺之祖焰、道行孤峻、爲邦人所欽。然人但見其能集前人之大成、幻出樓觀、而不知其游戲也。政和元年八月又詔以天寧萬壽名寺、七年三月、遣僧慶瑫來乞文以記其事<sup>10</sup>。

このように、崇寧二年（1103）当時、徳延は信州天寧寺の住持要請に応じている。この寺には多くの伝奇が残る。その始めは楊呉武義の初年（919）に建立され、大将の周本により精舎が建てられ、興聖と名付けられ、のちに呉王から普明との名を賜った。建立当時は講僧の徳延が住持として招かれ、その弟子徳熙がこれを補助した。北宋崇寧二年（1103）に教寺を禪寺に改め、太守周頌（1036-1116）が長老の徳延を第一世とし、僧正の徳熙が寺院の重建を助けた。二回の事を司った者の姓が両者ともに周であり、かつ長老と協力者の法名もまた完全に一致していることは、確かにまれなことである。徳延の後に住持となったのは照覚禪師東林常総の門人の宗珩であり、政和七年（1117）に門人の慶瑫を派遣して恵洪にそのことを文章として記すよう依頼している。徳延の示寂年はこれ以前だろう。徳延ははじめ鵝湖に住持し、のちに天寧に住持している。彼もまた一代の宗師と言えよう。

『建中靖国統灯録』卷十一に拠れば、

廬山萬杉子章禪師

問：“道泰不傳天子令、時清盡唱太平歌、如何是太平歌？”

師云：“雲盡日月正、雪消天地春。”

僧曰：“恁麼則雨灑千峯秀、風動萬年枝？”

師云：“星江水闊連天碧、五老山橫宇宙寬。”

問：“師資未相見時如何？”

師云：“定光金地遙招手、智者江陵暗點頭。”

僧曰：“見後如何？”

師云：“父子親其居、尊卑異其位。”<sup>11</sup>

廬山万杉には、先に浮山法遠の門人の浩脩が住持しており、また善暹の門人の善爽や常総の門人の紹慈等も住持している。そのほか、さらに帰宗子章、すなわち、雲居元祐（1027-1092）の門人で、万杉子章と法名と時

代が一致する僧も、同じく廬山に住している。この二人はあるいは同一人物であって、前後して了元と元祐に参じ、万杉と帰宗とに居したがために、諸家はそれぞれ了元と元祐の門下として組み入れた可能性がある。

太平の歌曲はどのように歌うでしょうか。雲が流れれば日月は明るく、雪が解ければ天地は春だ。障が尽きれば智慧が開き、瞋が去れば慈悲は深くなる。法雨がひとたび降り注げば千峰は秀で、慧風が巻き起これば万年の枝。心は長江のように天に連なる碧、境は廬山のように地にそびえて高し。師資未見の時は、定光大師が天台金地にて遠く手招きし、智者大師が江陵の夢中で密かに頷いているようだ。師資が相見した後はどうでしょうか。父と子は親しく、師と徒は位を定める。

『建中靖国続灯録』卷十一に拠れば、

洪州資福宗誘禪師

上堂云：“唱彌高、和彌寡、九載少林、有口如啞。眨上眉毛、蹉過了也。山僧今日從空放下、爲什麼如此、盡法無民。”

上堂云：“龍泉今日與諸人說些葛藤。”良久、云：“枝蔓上更生枝蔓。”<sup>12</sup>

資福は、目録では龍泉とする。本人の自称から見れば、目録によるのが正しい。江西吉州には資福があるが、洪州には確認されない。隆慶慶賢(1029-1081)は熙寧十年(1077)に王韶の要請を受け龍泉に住したが、一年に満たずしてそこを去ることを求めている。また、常総の門人である西山龍泉夔禪師もここに住している。

曲は高かれど和することのできる者は少ない、達摩は啞のようだ。目をまばたいているうちにもはや逃している。もしひたすらに宗承を挙揚しようとするならば、法は尽き民もなし、法堂には一丈もの草が生え荒れ果ててしまう。やむを得ず空より下ろしてきて、すこし葛藤を述べ、学人の耳に聞かせよう。惜しむらくは枝や蔓がさらに伸びてしまった。

『建中靖国続灯録』卷十一に拠れば、

袁州龍興山居岳禪師

問：“師唱誰家曲、宗風嗣阿誰？”

師云：“自從達磨分流後、萬派都歸是一家。”

僧曰：“學人未曉、請師直指。”

師云：“集雲峯下四藤條。”<sup>13</sup>

居岳は了元が仰山に居したときの袁州龍興山の住持であり、仰山には集雲峰があって、慧寂の示寂後、ここに塔が建立された。ゆえに仰山が霍山景通を四回、藤のつるで打ったという故事を用いてその師承関係を暗に示している。

李弥遜（1089-1153）『筠谿集』卷二十四に拠れば、

大智禪師塔銘

政和五年、歲在乙未十一月十有八日、大智禪師希覺示寂。不病不恚、無有恐怖、以清淨水・身垢已、顧大衆云：“一切諸相、皆歸壞滅。”言訖而冥。其嗣子法淵、號曰慈覺、於後七年、於寶勝寺作窣堵波、藏其遺骨、稽首來謁筠溪居士、請爲之銘。居士於法未得自在、不能悉知是大比丘諸微妙行、復告慈覺：“爲我宣說汝師所得何法、我當爲汝稱揚讚歎。”於是慈覺良久、答曰：“我觀世間以及我身、諸所有法、因緣和合、衆妄發生。譬如幻師、見所幻人、了無可取及諸取者、況復有得而可言說。我今若言、如是爲法、如是非法、是爲謗師及謗如來。然念我昔、起心修行、菩薩梵行、勤求如來無上正覺、於善知識生尊重心、恭事懇請、無有疲厭。以是力故、得大辯才、能知一切出世世間諸言辭海、亦能普出百千種音、於一偈一句、乃至一字、廣演無量難解最上勝義。自謂已得無礙法門、持以求證諸大導師、咸皆稱讚、與我受記、令我信心、益自堅固。最後得見大智比丘、彼時見我說此法門、而作是言：‘善男子、無以聲音語言而作佛事、勿謂如來正法眼藏而可言說、末世衆生以取捨心、希望成道、唯益多聞、增長我見。我今默示汝三昧、無有一法不從此出、而實無有一可得法。’我時豁然、證無所證、拔猶豫箭、截

疑惑網、了知一切不從外來、雖復與我最初法門、不見分別是非二相、而令我心轉加調淨、如炬得火、普皆光燄；如舟得楫、無所繫着。我即於彼大智師前、歡喜踴躍、頭面作禮。而自歎言：善財南行、還見普賢、從初發心、所入佛刹、不及普賢一毛孔中一念所入、諸佛刹海微塵數倍。我於大智亦復如是。故我今者、欲以一法爲汝演說、實不可得。又我嘗聞、是大智師、夙植德本、久修勝行、於過去中、親近承事佛印比丘。佛印爲言：心境俱亡、復是何物？即於彼時、證是三昧、解力廣大、信眼明徹、直趣菩提、淨出離道。證燈相然、復以示我。非唯示我、亦以深心起大慈悲、於未諸證、悉以方便種種開示。因此願力入菩提場、三十九年、四領寶刹、所至興起、度大弟子、嗣法住世、皆能於是三昧、轉大法輪、紹隆佛種、無有窮盡。”居士聞已、得未曾有、卽爲慈覺、以偈讚言：

饑者易爲食、無復嗜正味。辛酸及苦鹹、自視皆甜相。至其屬厭時、不起更食想。享以衆妙膳、而反生惡憎。衆生苦輪回、樂法求解脫；因樂轉生愛、增長我慢山。聞聲及見色、得少便爲足；而於正法中、乃作空寂怖。縱橫斜見材、閉障出離道；自謂已證得、不知流轉因。良哉大智師、與衆作依怙；能於不二門、示現無相法。滅惑斷諸見、聞此正覺知；如持具足器、盛滿甘露食。隨取得飽足、歷劫有無盡；衆生知正味、永不念它食。唯趣一乘道、餘二卽非眞；刹那滅阿祇、十方亦銷隕。如是大智師、在處俱現前；雖復示涅槃、而實未嘗滅。故我與慈覺、歷耳得千悟；言說永不窮、稽首第一義。

大智禪師希覺(?-1115)は、政和五年乙未(1115)十一月十八日に示寂し、住持すること三十九年、ならば熙寧元年(1077)に出世したこととなる。四大刹に住したが、その詳細は不明である。その最後の住持地は饒州宝勝寺で、それは門人慈覚法淵が師のために塔を建立した地である。

希覺とその門人慈覚禪師法淵の事跡については仏教史料には記載されず、その法系や師承関係は不明である。

文中において大智がかつて親しく仏印比丘に師事し、のちに四大刹に住し、三十九年の間、開法したとあり、熙寧十年(1077)に出世したことと

なるが、この仏印とは仏印了元のことであろうか。

当時、仏印と号した者は少なくない。了元のほかには、仏印禪師智清(?-1110)がいる。しかし、この仏印が住持したのは二十年余りであり、その始めは元祐五年(1090)となるので、大智の師ではない。また、広靈寺仏印大師希祖は、紹聖中(1094-1098)に開法している。その時間から言えば、最も可能性があるのは、慧南の門人である南岳高台仏印禪師である。しかしこの仏印はその法名であり、師号ではない。このように、大智が親しかったのは、やはり仏印了元の可能性が高い。

『筠溪集』卷二十一「宣城水西道中雜言」に拠れば、

夜宿五松寺、與慈覺淵禪伯徐步乘月而西、行歌立談、度嶺尋壑、至白雲寺、由小徑下臨賞溪、則曳杖逍遙、觀水月相。復登東峯亭、環視羣山、雲聳玉立、微風過之、徑欲仙去、不謂是身乃在人寰也。

このように、李弥遜が宣和四年(1122)に宣城にいたとき、当時、五松寺の住持であった慈覺法淵と知り合い、法淵は彼に「大智禪師塔銘」の撰述を要請しているが、実際に撰述したのはあるいはこの後の事かもしれない。

『筠谿集』卷十四に拠れば、

夏日與妙現、老堂二公晚步江臯、露坐月下、夜分乃歸。老堂有詩、次其韻二首  
步屨榕根晚、明河九面橫。兩禪方外得、一笑坐中成。雲去天逾碧、星垂月自明。寒江正留客、倚杖看潮生。

また、

胡麻興不淺、未肯庾公賢。山意知秋近、江聲到寺前。夜涼新病後、月色正

愁邊。可惜江南夢、青燈照不眠。

また、『筠谿集』卷十七には、

和淵老妙現之什

乾坤渺渺一浮尊、萬象分明水四濱。虎脊橫空山作隊、魚鱗倒影海成紋。老僧詩罷閑欹竹、幽士餘齋正卧雲。妙現鏡中無一事、世間從此罷揮斤。

ここから、李弥遜と妙現の関係は非常に密接で、互いに詩のやり取りがあったことが知られる。妙現は淵老、すなわち法淵であり、妙現とは彼のもう一つの称号、あるいは彼の自号であり、慈覚とは朝廷から賜った師号であろう。老堂もまた彼の禅師号であるが、その事跡は未詳である。

『筠谿集』卷十七に拠れば、

次韻天寧通老見貽

病餘眞是獨醒人、還在僧窗自在身。竹杖芒鞋尋勝趣、齋盂禪板悟前因。江山臭味如相覓、猿鶴家風顧卜鄰。更有高人來着語、交游不怕白頭新。

また、張元幹（1091-1161）『蘆川歸來集』卷三に拠れば、

筠谿居士跳出隨順境界、把住放行、自在神通、縱橫妙用、已是摸索不著。妙現老子、猶眨句中眼、可謂善知識用心。謹次嚴韻上呈  
珍重筠谿舊主人、我知明水是前身。如何一念初無過、便有多生未了因。止  
酒褰襦成厭雜、逃禪槌拂要比隣。雲居嫡子重拈出、流布諸方此話新。

李弥遜は天寧長老に次韻し、張元幹は李弥遜の前韻に従って作詩しており、二つの詩は直接的に関係する。ただ、残念ながら天寧の原作は失われている。このように妙現は更に天寧通老となったように見えるが、これで



は事情に即しない。あるいは通は淵の誤りであろうか。二字の形は似通っている。そうでなければ意味は通らない。李弥遜には更に、「次韻仲宗、天寧見懷、月余卧病横山、得其詩頗動念、所以末句見意」があり、彼ら二人と天寧長老には交際があったことが知られる。

法淵は後に福州天寧寺に居を移し、二人はここで再び法縁を続けた可能性がある。李弥遜は早期には普現居士と自称しており、後になって筠溪居士と自称したが、それは特にはその晩年、筠溪に隠居した後である。彼と法淵とは比較的早期に知り合っているが、「塔銘」が作られたのはおそらく後のことであろう。なぜならば、彼は筠溪居士と自称しているからである。

張元幹はここで李弥遜が雲居の嫡子を新たに拈出し諸方に流布せしめたと明言しているが、明らかにこれは彼が雲居の嫡子である大智禪師のために「塔銘」を撰述したことを述べたものである。したがって大智禪師は雲居の嫡子であり、彼が了元の門人であることは明らかである。この句はあるいは次のようにも解釈できる。雲居の嫡子天寧妙現は彼が明水長老法遜の後継であることを改めて取り上げて、諸方に流布したと。ここでいう雲居の嫡子とは、大智希覚が雲居了元の門人であるのみならず、彼自身もかつて雲居の住持をし、雲居が彼の住持した四刹の一つであったことを示している。

希覚の生年は未詳であるが、彼は熙寧十年（1077）に出世開法しており、その生年は遅くとも康定元年（1040）であり、その師了元との差は大きくなく、ゆえに彼が嫡子の門人であることは明らかである。

慈覚法淵の生没年は未詳であるが、宣和四年（1122）にはまだ五松寺の住持であり、慈覚の師号もあることから、その生年はあるいは遅くとも熙寧三年（1070）であり、彼は後に福州に至って天寧寺に住持をし、李弥遜と重ねて前縁を続け、往来は頻繁で、さらに張元幹とも知り合った。その没年は未詳であるが、あるいは李弥遜の後であろうか。

恵洪には希一禪師という友人がおり、彼との関係は密接であった。

『石門文字禪』卷十三に拠れば、

余至清修、別希一禪師津發、如老嫗扶女外車、其義風可以起頽俗、將發作此。  
驚風急雨中秋後、回首長沙杳靄間。迎送初辭大藩府、逍遙來看小廬山。故  
人情義千鈞重、行客生涯一葉閑。明日旅亭勞晝夢、孤峰標格不容攀<sup>14</sup>。

これは恵洪が長沙を離れるときに撰述されたもので、彼は希一禪師の彼  
に対する待遇を「老嫗扶女（おばあさんがむすめを助ける）」ようだとし  
ており、希一禪師は彼より年長であったことが見て取れる。

『石門文字禪』卷二十八に拠れば、

請一老外座

眞誠所置、聖果證於履聲；正信之深、空義現於猊座。況鄰清淨之境、親瞻  
知識之儀。恭惟某人、華藏親孫、佛印嫡子、晨鐘暮鼓、揮雙劍之鋒鋌；水  
鳥樹林、露臥龍之頭角。法不孤起、此爲時節之因緣；大衆必臨、願聽緒余  
之警歎<sup>15</sup>。

希一禪師の師承の法系について、ここでその消息を暗示している。仏印  
嫡子、華藏親孫というのは、仏印は了元のことで、華藏とは善暹を指す。  
彼がかつて廬山開先華藏禪寺に住持していたため、華藏と称しているの  
である。

『石門文字禪』卷二十四に拠れば、

待月堂序

宣和四年二月辛亥、湘西眞身禪寺新堂成、余同道林眞教禪師、鹿苑希一禪  
師往登焉。堂臨晴湖、日光下徹、俯見遊魚。聚立縱望、湘西山雲之織纓、  
草木之深密、一覽而盡得之。眞教拊欄哦曰：“山邊水邊待月明、暫向人間借  
路行。而今卻向山邊去、只有湖水無行路。”語未卒、住持禪師妙德欣然曰：“吾

經行諸方、倦矣。既老來歸、將爲終焉之計。此句是吾心也。”希一請以待月名其堂、而使寂音記之。德公得法於智海佛印清公、臨濟十世孫、世爲泉南人、朴茂而歷落者也<sup>16</sup>。

ここからは、宣和四年（1122）当時、希一禪師が潭州鹿苑に住持していたことが知られる。この年の二月、真身禪寺の新堂が落成し、恵洪は道林真教や鹿苑希一とともに参観している。希一はそれを「待月堂」と名付け、恵洪に記の撰述を命じている。真身禪寺の住持妙徳は智海仏印智清の門人で、臨濟十世の法孫である。

智清もまた仏印と号していることにより、その事跡はあるいは了元のそれと混乱しているが、しかし彼は元居元祐（1030-1095）の門人であり、了元とは一世代の差がある。前述の資料において希一が華蔵の嫡孫であり、元祐はまだ開先華蔵の住持となっていないことが記されているため、その法孫であるはずはない。

『普覚宗杲禪師語録』卷一に拠れば、

政和初間、有熊秀才、鄱陽人。遊洪州西山、過翠巖。時長老諱思文、嗣佛印元禪師、亦鄱陽人。遣二人力、擡籃輿至淨相。所經林壑陰翳、偶見一僧、臬古神清、厖眉雪頂、編葉爲衣、坐於盤石、如壁畫佛圖澄之狀。熊自謂曰：“今時無這般僧。嘗聞亮座主隱于西山、疑其猶在。”出輿踞踏而前問曰：“莫是亮座主否？”僧以手向東指、熊輿二力隨手看、回頭失僧所在。而小雨初歇、熊自登石、視坐處猶乾。躊躇四顧、太息曰：“夙緣不厚、遇猶不遇也。”<sup>17</sup>

この記事は『禪林宝訓』にも見えるが、その真偽についての検証は不要である。馬祖（709-788）の門人西山亮禪師がもし政和の初め（1111）まで生きていれば、その寿命は三百歳を超えている。ここからは次の事情が確認できる。思文禪師は鄱陽の人で、始め雲居に住し、後には洪州西山翠岩に住し、政和の初年にはまだ在世であった。

【注】

- 1 統藏經78冊、711頁下。
- 2 統藏經78冊、711頁下、712頁上。
- 3 統藏經78冊、712頁上。
- 4 統藏經78冊、712頁上。
- 5 統藏經78冊、712頁上。
- 6 統藏經78冊、712頁上。
- 7 統藏經78冊、712頁上。
- 8 統藏經78冊、712頁中。
- 9 統藏經78冊、712頁中。
- 10 嘉興藏23冊、680頁下-681頁上。
- 11 統藏經78冊、712頁中。
- 12 統藏經78冊、712頁中下。
- 13 統藏經78冊、712頁下。
- 14 嘉興藏23冊、635頁中下。
- 15 嘉興藏23冊、715頁中。
- 16 嘉興藏23冊、695頁上。
- 17 統藏經69冊、630頁下-631頁上。

(翻譯担当：大澤邦由)

# **A brief study about Foyinliaoyuan Zen master's disciples**

**Xu Wenming**

Foyinliaoyuan Zen master has many outstanding disciples . The article studies the life story and Zen thoughts of more than ten disciples in the existing data by thoroughly arranging and researching about Foyinliaoyuan's disciples, basing on the reference material —*Jianzhongjingguoxudenglu*.

# 徐文明氏の発表論文に対するコメント

池田 将則\*

(韓国 金剛大学校)

徐文明氏（以下「論者」）の論文「仏印了元禅師門人略考」は、題名が示すとおり、北宋中期の雲門宗の禅匠である仏印了元（雲居了元、1032-98）の門弟たちの事跡について簡単に考察したものです。この論文は多くの問題をかかえています。評者の見るところでは、（一）論文の構成が学術論文としての構成要件を満たしていない、（二）本論の論述態度が公正でない、という二点が最も根本的な問題であると思います。以下、この二点を具体的に指摘し、そのうえで、最後に論文の修正を要求したいと思います。

## 一 論文構成の問題点

一見して分かるように、この論文には序論・結論がありません。また本論部分も少しの切れ目もなく一続きに記述されていて、一切、章立てがなされていません。これは論者が学術論文としての構成要件を無視していることを示しており、非常に問題であると考えます。

言うまでもなく、学術論文である限りは、序論において論文の問題設定と研究史上の位置づけとを明らかにし<sup>1</sup>、本論の考察を経たうえで、結論において論文の考察結果を明示しなければなりません<sup>2</sup>。本論文の場合であれば、論者は、なぜ仏印了元に着目し、しかもその弟子たちを考察対象とするのか、本論の考察によって何が明らかになったのかをはっきりと表明する必要があります。それがなければ、読者はこの論文の学問上の意義

---

\*金剛大学校仏教文化研究所HK教授。

を理解することができません。

あるいは論者の意図としては冒頭の「概要（摘要）」に序論の性格を持たせているのかもしれませんが、「佛印了元は北宋の著名な禪師である。……了元の門人には傑出した者が多く、本論ではその門人の事跡や機縁について少しく検討する（佛印了元为北宋著名禅师、……了元门人杰出者很多、今对其门人事迹机缘略作探究）」というだけでは、了元の門弟を研究対象に選定した動機の説明としてまったく不十分です。「著名な禪師の優れた弟子」など、ほかにいくらでもいるからです。

本論部分の論述・構成も問題です。上述のようにこの論文はまったく章立てがなされていませんが、評者の理解によれば本論は次のような構成となっています。

## 1 仏印了元の略歴

## 2 仏印了元の門人

### 2.1 『建中靖国統灯録』巻十一に「機縁語句」が記録されている門人

#### 2.1.1 杭州百丈山慶善院淨悟禪師

#### 2.1.2 常州善権山広教慧泰禪師

#### 2.1.3 洪州西山翠巖広化慧空禪師

#### 2.1.4 饒州密巖山浄土徳溥禪師

#### 2.1.5 饒州崇福徳基禪師

#### 2.1.6 雲居山真如院仲和禪師

#### 2.1.7 廬山同安崇勝幼宗禪師

#### 2.1.8 婺州宝林懐吉真覚禪師

#### 2.1.9 信州鵝湖山仁寿徳延禪師

#### 2.1.10 廬山万杉子章禪師

#### 2.1.11 洪州資福宗誘禪師

#### 2.1.12 袁州龍興山居岳禪師

### 2.2 『建中靖国統灯録』以外の資料に登場する門人

### 2.2.1 大智希覚

### 2.2.2 希一禪師

## 2.3 『建中靖国続灯録目録』巻中に名前のみ挙げられている門人

### 2.3.1 思文禪師

まず「1 仏印了元の略歴」は、論者はまったく典拠を示していませんが、基本的には仏国惟白（生卒年不詳）『建中靖国続灯録』（建中靖国元年〔1101〕撰）巻六の記事と覚範慧洪（徳洪、1071-1128）『禪林僧宝伝』（宣和四年〔1122〕撰）巻二十九の記事とを組み合わせたものです（後述）。ただ、了元といえは普通には周敦頤（周濂溪、1017-73）・王安石（1021-86）・蘇軾（蘇東坡、1036-1101）・蘇轍（1039-1112）らとの交流が有名であり3、『禪林僧宝伝』は特に了元と蘇軾との交遊を多くの紙数を割いて記述していますが、本論文ではまったく言及がありません。なぜ文人・士大夫を避けて狭義の「門人」（在家を除く）のみを考察対象とするのか、そのことによって何か了元の禪風に関する新たな発見があったのか、論者は読者に説明する義務があります。

次に「2 仏印了元の門人」の構成順序も、よく分からない部分があります。この論文の主資料である『建中靖国続灯録』の目録の了元の法嗣の条（『建中靖国続灯録目録』巻中）を確認すると、次のようにあります。なお〈 〉内は原文の小字、丸数字は評者が付加したものです。

雲居山了元仏印禪師法嗣二十人〈十二人見録〉

- ①杭州慶善悟禪師      ②常州善権恵泰禪師
- ③洪州翠巖慧空禪師    ④饒州密岩徳溥禪師
- ⑤饒州崇福徳基禪師    ⑥雲居真如仲和禪師
- ⑦廬山同安幼宗禪師    ⑧婺州宝林真覚禪師
- ⑨信州鵝湖徳延禪師    ⑩廬山万杉子章禪師
- ⑪洪州龍泉宗誘禪師    ⑫袁州龍興居岳禪師



- 〈⑬漢陽大別宗禪師 ⑭雲居山思文禪師〉  
〈⑮鼎州文殊道用禪師 ⑯饒州龜峰祖廉禪師〉  
〈⑰饒州安国以愉禪師 ⑱遂州東禪円同禪師〉  
〈⑲復州北塔惠琦禪師 ⑳鄧州香巖開禪師〉  
〈已上八人未見機縁語句。〉(Z2乙.9.1.8b; SZ78,629b)

この目録には了元の法嗣として全20人の名が列举されています。このうち①から⑫までの12人は『建中靖国統灯録』巻十一に「機縁語句」が記録されている門人であり、⑬から⑳までの8人はこの目録に名前が挙げられているのみで、『建中靖国統灯録』に「機縁語句」が記録されていない門人です。評者が作成した前掲の章立てにあるとおり、本論文の「2.1 『建中靖国統灯録』巻十一に『機縁語句』が記録されている門人」ではこの目録の①から⑫までの12人が順に取り上げられており、「2.3 『建中靖国統灯録目録』巻中に名前のみ挙げられている門人」では⑬から⑳までの8人のうち⑭「雲居山思文禪師」一人だけが取り上げられています。

ここでまず疑問に思うのは、なぜ⑬から⑳までの8人のうち⑭「雲居山思文禪師」だけを取り上げたのか、という点です。ほかの7人については特に資料を見つけることができなかつたということなのでしょう。それとも、この論文は実は未完で、残りの7人についてもあらためて論じる予定があるのでしょうか。また前掲の章立てにあるとおり、この論文では「2.1 『建中靖国統灯録』巻十一に『機縁語句』が記録されている門人」と「2.3 『建中靖国統灯録目録』巻中に名前のみ挙げられている門人」とのあいだに「2.2 『建中靖国統灯録』以外の資料に登場する門人」が挟まれています。この構成にはどういう意図があるのでしょうか。論者はそもそも上引の目録すら読者に提示していませんが、本論の構成について説明することは論者の義務です。

## 二 論述態度の問題点

次に問題なのは、本論部分（「1 仏印了元の略歴」と「2 仏印了元の門人」）の論述態度です。論者はここで自身の論述の根拠となる出典や典拠を一切提示していないので、読者は論者の言うことが正しいのかどうかを判断することができません。このような論述の仕方は、学術論文の論述態度としてきわめて不当であると考えます<sup>4</sup>。

以下、この論文の冒頭の二項、すなわち「1 仏印了元の略歴」と「2.1.1 杭州百丈山慶善院浄悟禪師」とを取り上げて、論者の論述の不当性を具体的に指摘します。

### （1）「1 仏印了元の略歴」

前述のように、この項で説かれる了元の略伝は、基本的に『建中靖国統灯録』巻六の記事と『禪林僧宝伝』巻二十九の記事とを組み合わせたものです<sup>5</sup>。ここで論者が典拠を明示していないことがまず問題となります。しかしさらに問題であるのは、典拠が不明の記述が二つ見出されることです。

嘉祐元年（1056）、二十五歳、この年、善暹が入滅し、白雲守端が承天禪院に住持し、了元は師のために葬礼を営んだ。（嘉祐元年〔1056〕二十五歳、是年善暹入灭、白云守端住持承天、了元为其师营葬礼。）

嘉祐四年（1059）、二十八歳、居衲は円通禪院を白雲守端に譲り、守端に替えて了元を江州承天禪院の住持に推挙した。（嘉祐四年〔1059〕二十八歳、居衲让円通禅院于白云守端、举了元代替守端住持江州承天。）

まず一つめの文章において、論者は了元の師である開先善暹が嘉祐元年（1056）に示寂し、了元が善暹の葬礼を営んだと述べています。これは了

元の伝には存在しない内容です。また評者が調べた限りでは善暹の卒年を明らかにする資料はなく、善暹の生卒年は不明と考えられています<sup>6</sup>。論者は何か評者の未知の資料にもとづいてこの文章を記述したのですが、その典拠を提示してくれなければ、論者の言う内容が正しいのかどうかを判断することができません。

次に二つめの文章において、論者は嘉祐四年（1059）、了元が28歳の時に、雲門宗の普楽子栄（延慶子栄、生卒年不詳）の法嗣である円通居訥（祖印居訥、1010-71）<sup>7</sup>が、臨済宗楊岐派の祖、楊岐方会（992-1049）<sup>8</sup>の法嗣である白雲守端（1025-72）に円通禅院を譲ったと述べています。そして円通禅院に移った白雲守端に替えて、了元を江州承天禅院の住持に推挙した、とも述べています。上に挙げた一つめの文章によれば、白雲守端は嘉祐元年（1056）には承天禅院に住持していました。したがって、論者の記述に従えば、白雲守端は1056年（かあるいはそれ以前）から承天禅院に住持していたが、1059年に円通禅院に移り、その際に白雲守端に替わって了元が承天禅院に住持することとなった、という時系列であることが分かります。

しかし『禅林僧宝伝』巻二十八所収の白雲守端の伝によれば、円通居訥が白雲守端に円通禅院を譲ったのは、白雲守端が28歳の時です<sup>9</sup>。雷庵正受（1146-1208）『嘉泰普灯録』（嘉泰四年〔1204〕撰）巻四によれば白雲守端は熙寧五年（1072）に世寿48歳で遷化している<sup>10</sup>、白雲守端が28歳であった年は皇祐四年（1052）となります。つまり白雲守端が承天禅院から円通禅院に移ったのは1052年のことであり、論者の論述内容と合致しません（ちなみに、白雲守端は28歳より前の時点ですでに承天禅院に住持したと考えられるので、論者が了元を評して「二十八歳とは、知られている資料の中で最も早く住持となった記録であり（二十八歳、是已知資料中最早担任住持的记录）」というのは妥当ではありません）。

さらにいえば、『禅林僧宝伝』巻二十九の了元の伝には、了元が28歳の時（1059年）に承天禅院の住持の座が空席となったので円通居訥が了元を推挙した、と書かれているだけで<sup>11</sup>、白雲守端が承天禅院から円通禅院に

移ったこととの関連は一言も述べられていません。論者は一体何を根拠に、上の二つの文章を記述したのでしょうか。評者の調査によれば論者の記述は誤りですが、しかし論者が依拠した資料が不明なので、誤りであると断定することもできません。結局、論者が出典・典拠を開示していないために、論者の論述を承認することも批判することもできないのです。

## (2) 「2.1.1 杭州百丈山慶善院浄悟禪師」

次は「2.1 『建中靖国続灯録』卷十一に『機縁語句』が記録されている門人」の最初の項目である「2.1.1 杭州百丈山慶善院浄悟禪師」を取り上げます。なお「2.1 『建中靖国続灯録』卷十一に『機縁語句』が記録されている門人」の各項は、基本的に①「住持年代などに関する考証」と②「『機縁語句』の説明」という二つの要素から成りたっていますが、ここでは①「住持年代などに関する考証」の部分のみを扱うこととします。②「『機縁語句』の説明」はいわゆる禪問答の解釈であるため、禪研究の門外漢である評者としてはやや扱いづらい面があるからです。しかし「論述の根拠となる出典や典拠が一切提示されていない」という問題点は、②「『機縁語句』の説明」の部分もまったく同じです。

さて浄悟禪師（生卒年不詳）の住持年代について、論者は次のように考証しています。

杭州慶善院は、契嵩の時期には智岩が慶善精舎に住持し、また、慈明の法孫、武泉惟政の法嗣である宗震禪師もここに住持し、宗震の門人である普能禪師も住持し、さらに善能と同輩の守隆も住している。このため、浄悟が住持をした時間はそれほど長くはないだろう。（杭州庆善院、契嵩之时有智岩住持庆善精舎、又有慈明之孙、武泉惟政之子宗震禪師于此住持、宗震門人普能禪師亦住此寺、还有与善能同輩的守隆、因此净悟住持的时间不会太长。）

ここでも論者は論述の根拠を一切示していませんが、評者が調べたところ

ろでは、まず「契嵩の時代に『智岩』が慶善精舎に住持していた」という記述の典拠は契嵩『鐔津文集』卷十一所収の「山茨堂叙」<sup>12</sup>であり、「山茨堂叙」が撰述された慶暦七年（1047）頃に「智岩」が慶善精舎に住持していたことが分かります。契嵩とは雲門宗の洞山曉聰（?-1030）<sup>13</sup>の法嗣である仏日契嵩（明教契嵩、1007-72）<sup>14</sup>です。また「智岩」の「岩（巖）」は「巖」の誤りで、正しくは智巖禪師（生卒年不詳）です。

次に「慈明」とは臨済宗の汾陽善昭（946頃-1023頃）<sup>15</sup>の法嗣である石霜楚円（986-1039）のことです<sup>16</sup>。また「武泉惟政」の「惟」は衍字で、正しくは石霜楚円の法嗣である武泉山政禪師（生卒年不詳）<sup>17</sup>です。「宗震禪師」とはその武泉山政禪師の法嗣である慶善宗震（986-1072）<sup>18</sup>であり、「普能禪師」とはその慶善宗震の法嗣である慶善普能（生卒年不詳）<sup>19</sup>です。

またさらに「善能と同輩の守隆」とありますが、「善能」は「普能」の誤りで、直前に出た慶善普能を指します。「守隆」とは臨済宗の浄土善思（生卒年不詳）<sup>20</sup>の法嗣である慶善守隆（生卒年不詳）<sup>21</sup>です。慶善普能と慶善守隆とが同輩であるというのは、両者とも石霜楚円の法曾孫にあたるからです（石霜楚円→武泉山政→慶善宗震→慶善普能、石霜楚円→菩提光用→浄土善思→慶善守隆）。

論者は以上のような情報をふまえたうえで、「浄悟が住持をした時間はそれほど長くはないだろう」と結論しています。この結論は、了元の法嗣であり慶善院に住持した浄悟禪師の活動年代と、浄悟禪師以外に慶善院に住持した智巖禪師・慶善宗震・慶善普能・慶善守隆の活動年代とがごく大まかに言って近接している、という事実を前提とするものですが、上記のような複雑な情報を一体誰が注記なしで理解できるのでしょうか。上に指摘したような複数の誤字・衍字を含む記述では、なおさら理解は困難です。

繰り返しになりますが、学術論文である以上は、客観的な検証に耐えられるように、自分が論証に用いた根拠をすべて提示しなければなりません。そうでなければ、結局誰も論者の主張を受け入れることはできないのです。

なお読者の便のために、上に述べた以外の明らかな誤字を指摘しておく

と、「2.1.3 洪州西山翠巖広化慧空禅師」の項に出る「文峰文悦」は雲峰文悦 (997-1062)<sup>22</sup>の誤り、「2.1.5 饒州崇福德基禅師」の項に出る「洞山晁舜」は上述の洞山晁聰<sup>23</sup>の誤り、同じく「大滙懷祐」は大滙懷宥 (生卒年不詳)<sup>24</sup>の誤り、「2.1.7 廬山同安崇勝幼宗禅師」の項に出る「懷祐」も懷宥<sup>25</sup>の誤り、「2.1.11 洪州資福宗誘禅師」の項に出る「隆慶慶賢」は隆慶慶閑 (1029-81)<sup>26</sup>の誤りです。

## おわりに—論文修正の要求

以上、(一) 論文構成の問題点と (二) 論述態度の問題点とを指摘しました。最後に、以上をふまえて、次の二点の修正を要求したいと思います。

1. 序論と結論をつけて、この論文の問題設定、研究史上の位置づけ、考察結果を明らかにすること。また本論の中身をいくつかの節に分けて、論文の構成を明確にすること。
2. 本論の論述のなかで用いた出典や典拠をすべて脚注に明記すること。

本大会の論文集は日・中・韓の三か国で出版され、多くの研究者の目に触れます。幸い、修正期間も設けられていますので、上の二点を必ず修正してください。以上で論評を終わります。

### 略号

SZ: 『新纂大日本統藏経』(東京: 国書刊行会、1975-89年)

T: 『大正新脩大藏経』(東京: 大正新脩大藏経刊行会、1924-34年)

Z: 『大日本統藏経』(京都: 藏経書院、1905-12年)

### 参考文献

阿部肇一 [1986] 『増訂 中国禅宗史の研究——政治社会史的考察』(東京:

研文出版)

石島尚雄 [1999]「道元禪と雲門宗に関する一考察——特に善暹を手がかりとして」(『印度学仏教学研究』第48巻第1号)

伊吹敦 [2001]『禪の歴史』(京都：法蔵館)

九州大学大学院法学研究院 [2015]『中国人留学生のための法学・政治学論文の書き方』(福岡：中国書店)

鈴木哲雄 [1998]「建中靖国統燈録の住地別人名索引」(『人間文化 愛知学院大学人間文化研究所紀要』第13号)

永井政之 [2008]『唐代の禪僧11 雲門 立て前と本音のはざまに生きる』(京都：臨川書店)

陳垣 [2008(1939)]『釈氏疑年録』(揚州：広陵書社。原刊1939年)

#### 【注】

1 九州大学大学院法学研究院 [2015：117 (237)]。

序論では①先行研究を整理して、あなたの問題関心に密接に関連する、批判に値する主要な研究の内容を紹介・批判し、学界の最高の研究成果を示す。②問題の所在を示し、現在最も重要な論点、およびそれが学術的価値を有するかどうかを指摘する。③どのような方法を用いれば最も効率的にその問題を解決できるか、その手法の優れている点は何かを含めて研究方法を提示する。④論文で主に使用する重要な資料について説明する。⑤論文あるいは各章の内容について簡単に説明し、読者に論文の「地図」を提示する。以上のことが必要となるのである。(在序論部分有**必要包含以下内容**：①整理研究成果、介绍、批判与你所关心的问题点密切相关的、值得批判的主要研究的内容、展示学界的最高研究成果。②指出问题的所在、现在最重要的论点及学术上的价值。③用什么方法能够最有效地解决问题、介绍所使用的方法、并提示该手法的优势。④说明论文中主要使用的重要资料。⑤简单说明论文各章的内容、向读者提示论文的“地图”。)

2 九州大学大学院法学研究院 [2015：124 (242)]。

結論部分は端的に言って、各論での分析の結果を総括するところである。

その上で、この結論のどういったところに意味があるのか、さらには将来的議論の発展性、未解決の問題などを提示する。(简单的说、结论部分即对各部分分析结果的总括。在此之上、提示该结论有何意义、将来发展的可能性、及还没解决的问题。)

- 3 阿部肇一 [1986] 第三篇第五章「雲門宗における仏印了元の歴史的意義」、伊吹敦 [2001:97-99]、永井政之 [2008] 第三章第四節「仏印了元と蘇東坡」などを参照。

- 4 九州大学大学院法学研究院 [2015:122 (240)]。

本論は提示→分析・論証→結論の反復動作が繰り返される部分なのである。ここでは研究対象、研究方法、研究結果が詳細に追跡されていなければならない。読者があなたと同じ分析過程を理解できるように、全て表に出さなければならない。自分の主張のみを顧みることや、個人的趣味による判断には意味がない。それぞれの細かな自分の主張・意見を提示する際には、必ず根拠がなければならない。こうした根拠を用いた分析過程を全てさらす必要があり、秘密主義は厳禁である。(主论便是对提示→分析、论证→结论的反复循环的过程。在这里应当详细的表现研究对象、研究方法、研究结果。为了让读者能够明白你的分析过程、一定要毫无保留地表达出来。只顾着展示自己的主张、或根据个人好恶的判断是没有意义的。在表达自己每一个细小的主张、意见时、都一定要有根有据。由这些根据展开的分析过程也要全部展现出来、严禁秘密主义。)

- 5 『建中靖国続灯録』卷六、廬山開先善暹禪師法嗣

雲居山仏印禪師、諱了元、姓林氏、饒州浮梁人也。至(→明?)道壬申六月六日誕生、祥光上燭、鬚髮爪齒宛然具体、風骨爽拔、……閩里先生称曰神童。……

三十餘年、九坐道場、四衆傾向、搢紳碩儒咸欽道望、名動朝野。(Z2乙.9.1.54bc; SZ78,675c-676a)

『禪林僧宝伝』卷二十九、雲居仏印元禪師

元生三歳琅琅誦『論語』、諸家詩五歳誦三千首。既長、從師授五經、略通大義。去讀『首楞嚴經』于竹林寺、愛之、尽捐旧学、白父母、求出家、度生死、礼宝積寺沙門日用。試『法華』、受具足戒。

遊廬山、謁開先暹道者。暹自負其号海上横行、俯視後進。元与問答捷給、暹大称賞、以為真英靈衲子也。時年十九。

已而又謁円通訥禪師、訥驚其翰墨曰、「骨格已似雪寶、後來之俊也」。時



書記懷璉方応詔而西、訥以元嗣璉之職。

江州承天法席虚、訥又以元当遷。郡将見而少之、訥曰、「元齒少而徳壯、雖万耆衲、不可折也」。於是説法為開先之嗣。時年二十八。(Z2乙.10.3,279d ; SZ79,550c)

- 6 参考までに、石島尚雄 [1999] は善暹が確実に生存していた年代を1025年から1063年までと推測している。
- 7 円通居訥の伝は『禅林僧宝伝』卷二十六。生卒年は陳垣 [2008 (1939) : 102] による。  
『建中靖国統灯録目録』卷上  
襄州洞山普楽子栄禅師法嗣二人〈一人見録〉  
江州円通居訥禅師 (Z2乙.9.1,4a ; SZ78,625a)
- 8 楊岐方会の伝は『禅林僧宝伝』卷二十八。生卒年は陳垣 [2008 (1939) : 99] による。
- 9 『禅林僧宝伝』卷二十八、白雲端禅師  
……辞去徧遊廬山。円通訥禅師見之、自以為不及、拳住江州承天、名声爆耀、又讓円通以居之、而自処東堂。端時年二十八。(Z2乙.10.3,277bc ; SZ79,548b)
- 10 『嘉泰普灯録』卷四  
熙寧五年 (1072) 遷化、寿四十八。(Z2乙.10.1,48a ; SZ79,316b)
- 11 『禅林僧宝伝』卷二十九、雲居仏印元禅師  
江州承天法席虚、訥又以元当遷。……時年二十八。(Z2乙.10.3,279d ; SZ79,550c)
- 12 契嵩『鐔津文集』卷十一、山茨堂叙  
南宗智巖師主慶善精舎、……且以書邀其侶契嵩曰、「吾虚是室以待子」。  
……  
慶曆丁亥 (1047) 孟春之晦日序。(T52,705bc)
- 13 『禅林僧宝伝』卷十一、洞山聡禅師  
天聖八年 (1030) 六月八日示疾、……言卒而化。(Z2乙.10.3,244a ; SZ79,514b)
- 14 仏日契嵩の伝は『禅林僧宝伝』卷二十七。生卒年は陳垣 [2008 (1939) : 102] による。  
『建中靖国統灯録目録』卷上  
筠州洞山曉聡禅師法嗣五人〈三人見録〉

……

杭州契高明教禪師 (Z2乙.9.1.4b ; SZ78,625b)

- 15 汾陽善昭の伝は『禪林僧宝伝』卷三。生卒年は陳垣 [2008 (1939) : 96] による。

- 16 石霜楚円の伝は『禪林僧宝伝』卷二十一。生卒年は陳垣 [2008 (1939) : 99] による。

『建中靖国統灯録目録』卷上

汾州太子禪院善昭禪師法嗣九人 (八人見録)

潭州興化慈明禪師

筠州大愚山守芝禪師 (Z2乙.9.1.3a ; SZ78,624a)

- 17 『建中靖国統灯録目録』卷上

潭州興化慈明禪師法嗣四十六人 (二十四人見録)

……

筠州武泉政禪師 (Z2乙.9.1.5b ; SZ78,626b)

なお、以下の検証においては鈴木哲雄 [1998] を大いに参照した。

- 18 『建中靖国統灯録』卷十四、筠州武泉政禪師法嗣

杭州慶善震禪師。師於熙寧五年 (1072) 八月十一日集衆云、……吾今世縁將謝、聽吾偈曰、

諸法本無生 皆隨信心起

千聖密相伝 展轉無終始

言畢、趺坐而逝。寿八十七。(Z2乙.9.2,111b ; SZ78,732b)

- 19 『建中靖国統灯録目録』卷下

杭州慶善宗震禪師法嗣一人見録

杭州慶善普能禪師 (Z2乙.9.1,14bc ; SZ78,635b)

- 20 『建中靖国統灯録目録』卷中

杭州塩官菩提用禪師法嗣一人見録

杭州浄土善思禪師 (Z2乙.9.1,9d ; SZ78,630c)

- 21 『建中靖国統灯録目録』卷下

杭州浄土思禪師法嗣二人見録

……

杭州慶善守隆禪師 (Z2乙.9.1,15a ; SZ78,636a)

- 22 『建中靖国統灯録』卷八、筠州大愚山興教守芝禪師法嗣

後洪師請居西山翠巖。次移南嶽法輪雲峰。(Z2乙.9.1,68d ; SZ78,690a)

『禪林僧宝伝』卷二十二、雲峰悦禪師

芝（＝大愚守芝）移住西山翠嶺、悦又往從之。（Z2乙.10.3,264d ; SZ79,535c）

久之、南昌移文請住翠嶺。（Z2乙.10.3,265a ; SZ79,536a）

23 『建中靖国統灯録目録』卷上

筠州洞山曉聰禪師法嗣五人〈三人見録〉

筠山大愚曉舜禪師

潭州大瀉山宥禪師（Z2乙.9.1,4b ; SZ78,625b）

24 『建中靖国統灯録目録』卷中

潭州大瀉山懷宥禪師法嗣四人〈三人見録〉

廬山歸宗惠通禪師

……

饒州崇福清雅禪師（Z2乙.9.1,7d ; SZ78,628c）

25 直前の注を参照。

26 隆慶慶閑の生卒年は陳垣 [2008 (1939) : 107] による。

『禪林僧宝伝』卷二十五、隆慶閑禪師

鍾陵太守王公韶請居龍泉。不逾年、以病求去。（Z2乙.10.3,270c ; SZ79,541c）

# 池田将則氏のコメントに対する回答

徐 文 明

(中国 北京師範大学)

まず池田将則先生が私の論文『佛印了元禅師門人略考』を全編にわたって読んでいただき、またコメントいただいたことに感謝したいと思います。これらの建設的な意見を用いて論文を修正したいと思います。

説明しなければならないことは、この論文は私の『雲門宗研究』という著作の一部、すなわちこの著作の中の一節であるということです。この著作は近く完成し、明年（2018年）に正式に出版する予定です。

## 一、論文の構造についての問題

コメンテーターは論文の構造に重大な問題があると考えています。これは拙稿が章や節を用いていないという点であり、さらに私の論文の詳細な構造を列挙しています。こうした文章作法は、北京師範大学の学位論文の書き方の一つであります。このような書き方は明確に見えますが、その実、途切れ途切れな印象を与えます。

私はこうした西洋式の論文の書き方は好きではなく、これまでずっと中国の伝統的で比較的慣れ親しんだ書き方を用いてきました。すなわち一章、二章、三章と分けず、一気呵成で、混然一体とした書き方です。

本稿の構造は非常に単純です。つまり、了元の門人を個別に論じたものであり、基本的に『建中靖国統灯録』の順番によって、個別に新たに発見された人物と資料について単独で補足的に論じたものです。

仏印了元の重要性はいうまでもありませんし、その門人も当然重要で、根本的に特別な説明を必要としません。

本文はその名の示す通り、主に了元門人を探究したものです。了元の生

涯については、ただ導入として簡単に記したに過ぎませんが、詳しく述べるまでもありません。具体的な内容については、近く出版する著作（『雲門宗の研究』）の、了元本人についての箇所をご参照いただければ幸いです。了元の門人については、灯録の伝統に基づき、ただその出家の弟子を列挙しただけです。周敦頤、蘇軾、蘇轍などは了元と交流がありますが、彼の専門的な在家の弟子であると数えることはできません。了元の八人の機縁語句の見えない門人については、ただ思文を挙げただけです。その他の人は資料を発見していないので、論じることができません。

## 二、論述の態度の問題

### 仏印了元の生涯について

この部分は主に導入として、展開することもなく、全面的ではありませんので、詳細な内容は今後刊行予定の私の著作（『雲門宗の研究』）の了元の生涯の部分をご参照ください。

開先善暹の没年の問題については、私は専門的に研究したことがあります。善暹の部分をご参照ください。円通居訥が最初に白雲守瑞を推薦して、嘉祐元年に承天〔禪院〕に住持したこと、また嘉祐四年に円通〔禪院〕を守端に譲り、了元に彼を継がせて承天〔禪院〕に住持するよう推薦したことに関しては、私（徐文明）の論文、「白雲守端禪師の生涯」（『佛学研究』2016年）、「円通居訥の生没年について」（2015の黄梅会議論文）、「保寧仁勇禪師の生涯」（『禪文化』第一輯，中州古籍出版社 2011、4）などをご参照いただきたい。

守端が最初に承天〔禪院〕に住したのは、嘉祐元年三十二歳の時であり、二十八歳ではありません。『雲臥紀譚』巻一に記載される「愚嘉祐丙申孟夏，自円通応命，來繼茲席（私は嘉祐丙申〔へいしん〕の孟夏に、円通から命を受け、この席を受け継いだ）」（『卍新纂続蔵経』86冊、663頁下）という彼の言葉をご参照ください。

これらの分野について、私の記述に間違いはありませんし、これらはすべて禅宗史の常識に属しており、特別な説明の必要はありません。説明が必要なことは、恵洪が仏教史家として極めて厳格ではないために、記録する内容に誤りが多く、その上、意図的にねつ造した嫌いがあるため、鵜呑みにできないということです。コメンテーターは筆者の私に誤りがあると考えておられますが、実際には恵洪に騙されているのです。

## 2. 浄悟禅師

はじめにコメンテーターが注意深く拙稿を読んでいただいたことに感謝いたします。論文には多くの文字の誤りがありました。修正の時に詳細に訂正したいと思います。

武泉山政禅師について。「惟政」に作ったのは、『禅灯世譜』巻三の説を採用しました。その法嗣、慶善宗震（986-1072）の生没年については、実に疑問があります。この通りあるならば、彼の祖師である慈明と同年に生れたことになるからです。早すぎるように思われます。筆者は慶善寺の関連する歴代の住持の期間について継続的に検討し、詳細なリストを作成したいと思います。この作業は恐らく非常に困難でしょう。関連する段階で住持を務めた人物は多いので、浄悟が住持した期間は長くないだろうという結論には、恐らく大きな誤りはないでしょう。

出典について詳細さが足りないという問題については、筆者の意見は一般的に禅宗史の常識に基づいており、いずれも特別な説明を必要としませんし、紙幅を無駄に費やすことを避けています。また読者に対して敬意を表するためでもあります。コメンテーターが示された九州大学大学院法学研究院の学術論文の規則は非常に意義がありますが、けっして普遍的な基準ではありません。筆者が学術界の関連する成果を提出していないのは、これまで了元門下について専門的に論じた論文や著作を発見していないからです。また、禅宗は単刀直入を主張し、拖泥帶水に反対します。有話（言葉があれば）長くなり、無話（言葉がなければ）短くなります。文章毎に

すべて序論と結論がある必要はありませんし、新しい八股文の傾向が現れることを防ぐことができます。

### 三、論文の学術的貢献と新しい発見

本稿では了元門人について一網打尽的に理解すること、特に、大智希覚、希一禅師などのように、灯録にない門人を捜してまとめることに力を尽くしました。最近、本稿を修正する過程において、また新しい発見がありました。その発見とは、了元門下には、さらに以下に挙げる人物がいたということです。

- 1, 自順、号は順菩薩です。『陝西洋州志』と『輿地紀勝』に見えます。
- 2, 雲岩清禅師、「大慧普覚禅師普説」巻二に見えます。
- 3, 正己禅師については、張商英の『仰山廟記』を見てください。

ご専門の先生方々に、より多くの指導と助けをいただけることを期待いたします。

(翻訳担当：松森秀幸)